

ここに帰る

和田重正に学ぶ会

題字 和田重正

ここに帰る

第八十二号

令和六年七月一日発行

目次

『あしかび』 第四号	和田重正	2
柔軟心		
捨——家庭教育の問題		
『あしかび』 第五号	和田重正	6
自業自得		
判断に迷うとき		
朝日新聞より 子どもが善良なる故に不安		
『まき』 昭和四十八年七月号	和田重正	17
白い杖 聞く姿勢		
やま 7 柿の葉の人生	和田重正	15
『まき』 昭和四十八年八月号		
白い杖 能力と超能力		
やま 8 うたかたの記	和田重正	23
自分のフトン		
西湘まみず会通信 よく聞く		
『まみず』に出会って	和田重正	31
後記	山中真知子	28

表紙写真 ハヌ畑
長野県松川町上片桐
撮影 平澤正義





4

発行人 はじめ塾 和田重正
昭和三十五年六月

日曜の話

六月十二日

柔軟心

みんな羽田事件を知っているでしょう。

アメリカ大統領の秘書 Hagerly さんが五千人の安保
反対のデモ隊に取り囲まれて立往生をしてしまった
ので、アメリカ海軍のヘリコプターが来て助け出し
たという事件。そのときデモ隊の人々は Hagerly 氏の
自動車を棒で叩いて屋根を凹ましたり、石を投げて
ガラスを割ったりした、というわけですが、みんな
はこんな事件を新聞やラジオで知って、どんなこと
を感じているのでしょうか？ おそらく自分たちとは
あまり関係のない大事件ぐらいにしか思っていない

のではないかと思います。それはそれでいいのです
が、実は、この事件は日本人全体を非常な不幸に陥
れる方向に向かっていている日本の政治のありさまを示
しているのです、われわれのようかインテリの大人は、
たとえようもないほど心配しているのです。

いわゆる保守勢力と革新勢力と二つに分かれて、
どっちも後へひけず、お互いに手段を選ばず、目茶
苦茶でも相手を押し倒して、自分の主張を通そうと
する。しかも、両方ともが自分の主張こそ日本を安
全にし、繁栄させる道だと思いつ込んでいるのですか
ら、大へんな騒ぎになるのです。つまり、両方が国
のためだと思い、相手の言うようなことをしたら国
がつぶれると心配しているのですから、どうにも妥
協の余地がないのです。

どっちかが間違っているとか、悪いことをしよう
と思っているなら自然解決もつくのですが、この両
方の主張というものは、ものの考え方の立場が違っ
たのであって、各々の立場から言えば、両方ともまこ
とにごもつともなことですから始末がわるいの

です。ごもつともごもつともとの鉢合わせほど困るものはありません。これは個人の場合でも同じです。両方とも正しい。しかも、利害が相反する場合というものは全くどうにもならないものです。

(そんなバカなことがあるかという人もあるだろうが、実際にはいくらもあることです)

こういうわけで、日本は今、ニツチもサツチもできないようなところへ突っ込んでしまっています。

これを一体どうすればいいんだらう？

といっても今、君たちにはこれをどうすることもできないのだから、気の毒だけでも、心配しながら見ているより仕方がない。バカな大人たちだけが騒ぎ廻っている現状だが、少しはバカでない大人もいるのだから、そういう人たちの命がけの働きで、不幸をできるだけ小さく済ませるような道が開かれるでしょう。子どもとしてはそれを頼みにしているより仕方がないでしょう。ただこういう悲しむべき、また、恐るべき状態がどうして起こったのか、その一番根本のところには何があるかを知っておくことは

必要だと思えます。

私はその原因の最大のもの、日本人だけでなく人間が科学や産業をものすごく進歩させたのにかかわらず、自分を知り、自分を取り扱うという方面を少しも発達させなかったことだと思えます。自分を知ることが何故このような不幸を和らげる力になるのかというと、本当に自分というものを知ると心が柔らかくなるからです。どうしてそうなるか、このわけは説明しても役に立たないからしませんが、ともかく人間の心はいくらでも柔らかくなれるものです。

柔らかいといっても豆腐のような柔らかさではない。エバースフトかゴムマリのような弾力に富んだ柔らかさのことです。柔軟体操などというあの柔軟のことで、仏教ではよく柔軟心ということばを使います。岩のように堅くて、とんがっていたら、近づくとものを傷つけ、もしむこうも堅い場合にはこっちがこわれてしまう。保守と革新、資本主義と社会主義の両方の陣営はコチコチに凝り固まって、そして双方からカ一杯で押し合い、一歩も退こうとしない

のだから、そこに熱を発し、下手をすると両方とも
がこわれてしまうおそれがあります。羽田の事件は
その押し合いの間に出了た火花の一つですから実にあ
ぶない話です。これでもし、大統領が来たとき、も
っと悪い事件が起こったら、それこそ本当に日本は
真二つに割れてしまうかも知れません。そうなた
ときのわれわれの悲惨な有様は、戦争の経験のない
みんなには到底想像もつかないところです。

どうか両方とも日本人なのだから、この辺でどっ
ちかが少し凹んで、この最大の危機を切り抜けてく
ればいいのだが。両方ともが日本のためと思って
やっていることなら、自分の方が凹むことで日本を
救うことはたやすいはずだ。それがわからないとこ
ろに、心の堅さがあるのです。

意志が強いのと頑固なのとは違います。意志が強
いというのはあらゆる忍耐と努力によって、たとえ
遠廻りになっても目的を貫き通すことであって、何
でも自分の主張を通し、結局自分も傷ついて真の目
的を達することのできないような愚かな頑固さとは

まるで違うものです。よく頑固と意志の強さと間違
えられるが、頑固というやつは、しばしば途中で真
の目的を忘れさせてしまうものです。このくらい馬
鹿げたことはありません。

私はこう思っています。意志の本当に強い人は、
反対意見に出会ったときに、大ていの場合、そつで
すかと一応相手の立場を認めて、それから、しかし、
と自分の意見を主張するだけの余裕のあるものです。

イエス・バット法 (Yes・but) という話術があるそ
うだが、丁度、私の考え且つ実行している方法と全く
同一です。

なにしろ人と人とのことというものは、プチこわ
してはお互いに何の得にもなりません。相手を納得
させて、自分の主張を通してゆかなければ駄目なの
です。そのためには、まず自分が一度凹むことが必
要である場合が多い。そして凹んだ方が最後には勝
つのが世の中のきまりになっています。「負けるが勝
ち」というのは古くさい格言だが、どうも本当のよ
うです。保守も革新も、本当に勝つこんなうまいテ

のあることに気がつかないというのは、全く気が狂っているからでしょう。

それはさておき、みんなも、どうか心を柔らかくすることを心がけてもらいたいものです。

「お使いに行つて来てちょうだい」

「勉強してんのにヨウ」

と撥ね返さないで、

「ハイ、急ぎ？ 宿題してからじゃいけない？」とやつてごらん。

ガチャン！

「またやったの？ ボヤボヤしてるわね」

「失礼しちゃうわ、こんな置き方しとくんだもん」と撥ね返さないで、

「すみません」

と一応凹んだらどんなことになるでしょう。興奮してどなった方が負けるにきまっています。

心が柔らかいということは、どんなにすばらしいことでしょう。木の芽も柔らかいうちはどんどん成長します。堅くなったら成長は止まってしまいます。

人間の心も同じです。肉体は二十五歳ぐらいで成長が止まってしまいが、心は人によっては七十、八十になっても成長している人があります。そういう人の心は、いつまでも堅くならないで、柔らかくで新しいものを受け入れることができます。

ところが世の中を見ていると、三十や四十でもうすっかり成長の止まっている人がたくさんいます。ひどいものになると二十歳ぐらいでもうすっかり固まって、世間並の型にはまったことしか考えられない人さえあります。こういう連中は、たとえ肉体は七十、八十まで生きてても、心は二十歳ぐらいまでしか生きなかつたようなものです。

どうか、みんな、コチコチになったり、トンガツタリしないで、柔らかい心を持ってもらいたい。ではどうしたら、心を柔らかくしておくことができるか。人にもんでもらって柔らかくすることはできないのですから、どうしても自分で工夫するより仕方がありません。方法を教えることさえも無益です。

では、なんぞを…。

どなたでも なんでも

捨 —— 家庭教育の問題

家庭教育に関する問題はいろいろありますが、その中で最も重要で且つむずかしい問題の一つは、「捨^{しや}」ということができているかどうか、あるいはその必要がどの程度に理解されているかということだと思います。

「捨」というのは勿論すてるといふ字ですが、仏教では慈悲喜捨といつて、この字を、もう少し味の深い意味に使っています。ですから殊更に「しや」と読んでその意味を表わそうとしたわけです。

では、「捨」とはどういう味を指しているのかといえますと、普通の「すててかえりみない」の反対で、「心かけながらじつと見守っている」という意味なのだそうです。家庭の大人が子どもに対して、こ

の「捨」の態度がどのくらい徹底してとられているか。これは子どもの性格形成の上に決定的な影響力をもっていると思います。預かり子や継子^{ままこ}、あるいは実子の場合でもよくあることですが、世間体を考えて上のことを子どもにしてやっていると親がよくあります。そんなのは形だけとのえるのに汲々^{きやくきやく}としていただけで、本当に心にかけているのは自分自身のことです。子どもは実はすてられているのです。

こういう見せかけの愛情では子どもの心は健全に育たないのは当たり前ですが、このような実質的愛情の稀薄な場合は論外です。ここで問題になるのは、あり余るほど愛情があつて、しかもその愛情の故に子ども^{こども}の心の成長が妨げられている場合であります。

一般に、父母とか祖父母の愛は本能的なもので、純粹だといえばそう言えないこともないかも知れませんが、一面、強烈な「奪う愛」である場合の方が多いのも事実でしょう。ことにおばあさんの孫に対する愛は「わがものにならないでいられない」奪い取る愛であるのが普通ではないでしょうか。そういう

愛情によって、健全な性格が育てられるということ
は、あり得ないことです。また、世間によくある、
この子のために、この子の成長にすべてをかけて、
といった母子の間に、どんな烈しい執着と拘束が生
じることでしょう。そうした互いの異常な拘束から、
おおらかな、社会性豊かな人格が生まれるはずはあ
りません。

これは極端な場合ですが、両親が揃い、数人の同胞
のある普通の家庭においても、程度の差こそあれ、
親の本能的な奪う愛情をもって、子どもを束縛して
いると思います。そして、それだけ、その子は精神
の発達が悪われていることになります。末っ子とか、
長男などは普通、他の子にくらべて大きい被害者で
しょう。

しかし、現実の問題として、われわれには本能的
な愛情があります。ことに父親のない母子とか、孫
を与えられたおばあちゃんなど、境遇からいっそう
執着的愛情の強められている人々に「極楽的な捨」
をいきなり求めることがどんな無理であるかは理解

できません。しかも、われわれは、もう一つの現実に
対面しなければならぬのです。

それは、われわれの子どもの生存する世界は、原
始的な世界でなく、高度に有機化された文化社会で
あるということです。この社会に適応するためには、
本能的な愛情の囚とどろとして育てたのでは間に合いません。
ん。どうしても文化社会の意識に適応するように理
性的に練り直された愛情の中で育てられなければな
りません。そのように高められた愛情の様相が、「捨しゃ」
と言いつわられるのだと思います。

これは、むずかしいことです。正しい仏教徒とし
ての要件に先に述べた慈（人々に樂を与える）、悲（人
々の苦を抜く）、喜（他のよろこびをわがよろこびと
する）と捨の四つがあげられるのですが、おそらく
この四つの中でも、「捨」の実践は一番むずかしいの
ではないかと思われます。

でも、本当に子どもの幸福を願うなら、どんなお
ずかしさも克服しようとしてとめなければならぬで
しょう。

とはいえ、現実には何事も完全を望むことはできません。ですから、ただこういう心がけが、子どもの幸福のために、どんなに重要なことであるかをよくよく知って、それに少しずつでも近づいて行こうと工夫すればよいのだと思います。

たとえ、十分にその境地に達することができなくても、もし父母や祖父母が無反省に本能の赴くままに愛児を抱きかかえ、溺愛することなく、手を放つて静かに見守る工夫さえ続けるならば、必ず十二分の報いがあるに違いありません。至らぬままに誠意をつくして、一か二を達すれば、あとの八、九は自然に充たされるのが、この世の仕組みですから。

△行事と案内▽

○父母の会例会 六月二十日

短かい時間ですが、教育についての明るい希望や意見、心配や疑問など、各自の胸にあるものを持ち

寄り、率直に披瀝し合って、お互いの力になり合うよき機会にしたいと思えます。

○仏教講演会

那須政隆先生「人に佛心あり」

六月十九日

沢木興道老師 坐禅と講演

六月二十二日





5

発行人 はじめ塾 和田重正
昭和三十五年六月

日曜の話 六月十九日

自業自得

昨夜〇時に新安保条約の議会承認が自然に決まっ
てしまったが、ここ数日來のはげしいデモとそれに
対する政府、警察、右翼の動き、また、それに向か
って働きかける学者、文化人、その他一般市民、そ
ういう切迫したありさまを、固唾かたずをのんで見守る大
部分の国民の表情、われわれはその中の一人だが――。
この不安の中でわれわれが学ばなければならぬ教
訓がどれほどあるか知れない。

だから私は今、みんなに話したいと思うことが山
ほどあります。しかしこの朝の時間は短かく、その

話をするのにふさわしくないもので、それはいつか別
の機会に、お互いに寝転んで話し合えるときにする
ことにします。今日は自業自得という話をするつも
りですが、その前にみんなによく言っておきたいこ
とがもう一つあります。

漢字と英単語はだれでも 実行しなければならぬ

漢字と英単語を書くことは塾生はみんな必ずやら
なければならぬ、ということですが、やりたい人は
やりなさいというのではありません。このくらしいの
ことは、実行できないことではない。第一、誰でも、
こんな努力ぐらいはしなければいけない。一、二回
提出して中止してしまっている人もいます。そんな
ことではいけない。一人残らず毎日実行しよう。

さて、ジゴウジトク自業自得ということばをみんなは聞いた
ことがあるかしら。これは仏教語だからジギョウと

は言いません、ジゴウと読みます。これは高校入試などにしばしば出てきますから憶えておきなさい。

このことばの深い意味を十分に説明することはとてもできませんが、要するに、人間は自分のしたことの結果は必ず自分が引き受けるようになってきている、ということですよ。普通このことばは、人が何か思わぬ不幸に会った場合に「あの人があんなったのは誰のせいでもない、あいつはウソツキなんだ。気の毒だけど自業自得さ」といったように、悪いときに使います。「彼が入学試験に落第したのは自業自得だよ。いくら、今の目的をハッキリ持てと言ってやってもきかないで、いろんなくだらないことに気を散らしていたからだ。あれではどんなに本人は骨を折って、長い時間勉強したつもりでも駄目だね」といった使い方です。

しかし、このことばの本来の意味では、よい方にも同様に使っているのです。「彼女は近頃大へん明るくなって成績もどんどんよくなってきたが、あれは狭いケチな根性を捨てようと一生懸命努力してきた

からだね、自業自得だね」

実は、今日みんなに話そうと思ったのは、この言いかたの意味に重きをおいての話なのです。つまり、よい立派な人になって、人からも好かれ、張り合いのある楽しい日々を送ることができるようになるのは自分であって、人がしてくれるのではない。いくら他の人がそうしようと思っても、自分がそうなるような原因をつくっておかなければ仕様のないものだ、ということですよ。

子どもというものは、だいたい誰かに、どうにかしてもらおうくせがついていますから、この自業自得ということにハッキリ気がついていない場合が多いようです。ことに近頃は、教育についてのハンパな議論が盛んになって「子どもばかりせめても駄目だ、子どもがよくなるかどうかは親や教師や、環境次第である。子ども自身のせいではない」などという意見が子どもたちの耳にも自然入っているのです、何でも自分のせいでないように思い込んでいる面が多い

のです。

だが、子どもは、もう一段と本当のことを知らなければなりません。自分の播いた種からできたものだけしか本当の自分の身にはならないということですから。品物なら、場合によつたら他の人の播いたものを盗んだり、もらったりすることもできますが、運命については自分が種を播いておかないで他のものを盗むということは絶対にできません。

これは一分のゴマ化しもできない巖然たる事実なのですが、大人の人でもこれほどハッキリ見究めている人は少ない。

だから、こういうことはハッキリと知っておかなければ損です。この話はちよつとわかりにくいけれど、要するに、よくなるうと思えば自分がよくなるに必要なよいことをしなければなりません。その代わり、そうすれば必ずそれに相当しただけの結果も出てくるということを知ってもらいたいと思つたのです。

そうか、では自分はいいことをして、立派な人間になりましょう、と思う人のために、一つよい知恵を授けましょう。

——よいことにはいろいろあります。正直、勇氣、親切、忍耐、努力、勤勉、素直、などありますが、こういうことをみんな真えなければならぬと思つて、心がけようとしたら、実際にはどうしていいかわからないことがたくさん起つてきます。だから私は、そんなに欲張らずに、そのうちの一つだけを取り上げて、それを身につけるように工夫すればよいと思ひます。私は昔からさういうふうにしてきました。

なぜ、それでいいのかというと、あらゆるよいことというものは、みんな関連し合つた一族なので、そのうちの一つをうまくやろうと思つて取り上げると、他のよいことは全部くつついてくるものだからです。だからどれでもいい、自分に一番身近なものを取り上げて、それを養うように心がければいいのです。

ついでですがわるいことも同じで、すべてのわるいことはみんなつながっている。そのうちの一つを身につけて養っている、すべてのわるいことがくっついて育ってくるものです。「悪魔の眷族」けんぞくなどというのは、そういうことを言ったのでしよう。

おぼろしい理屈を言う前に、まず簡単に「よいことをしよう」と方針を決めましょう。

まとまりのない話になってしまいました。寝不足で頭がわるくなっているからです。こんな話しかできないのも自業自得です。

おとなのページ

判断に迷うとき

父母の会六月例会（二十日）で話したことの摘要を記します。

流血の惨事を起こした新安保反対大デモのあった直後ですから、自然、話がそれに関したことからはじまりました。

心ある学生は、デモに参加したのも、参加しなかったものも深刻な疑問にぶつかっているようです。それは新安保反対かどうかについての迷いではなく、石ころ一つが暴動のキッカケになり得るあのデモにでも普通の学生が参加すべきかどうかということです。その点について、自分の今とっている行動に自信が持てないのです。

これはもつともなことだと思えます。ある特定の主義を信奉している人や興奮性の無自覚な学生は別ですが、見込みのある学生ならば必ずそうあるべきだと思えます。

彼らはみな「僕らはどうしたらいいのでしょうか」とたずねます。私はそれに対して「参加せよ」とも「参加するな」とも言えません。あるいは参加したからいい、参加しなかったから卑怯だ、などという批判の仕方でもできません。私はただこう言うことが

できるだけです。

「参加すべきだとの確信を持たらなければよい。その行動は、結果如何にかかわらず立派だ。しかしその確信が持てなければ、心配しながらじっと見守っているより仕方がない、これは参加すべきだと思いつながら踏み切ることができない、いわゆる躊躇^{ちゆうちゆう}逡巡^{しゆんしゆん}とは違うので、たとえ友だちなどから罵^{ののし}られても、それが自己に忠実な道であるなら仕方がない」

「私はそういう生き方に強い確信を持っている。それは、戦争中の、思い出しても身震いするような苦い体験から得た、悔いを残さぬための生活の知恵である」と。

私はそのように、心配しながらじっと見守っている人の層が厚ければ厚いだけ、問題の解決は正しい方向に向かって動いて行くものだと思っています。

もし誰も彼もが半疑のまま飛び出して行ったらどうなるでしょう。世の中は簡単に目茶苦茶になってしまう。だから学生諸君も、確信を持ってない

なら、そうしてもらいたいと思います。

ただ、実際問題として、特殊な主義とか信仰を奉じていない限り、普通の学生が、こういう根の深い政治問題に関する熱しきったデモ行動に対して、自分のとるべき態度に自信を持って決定を与えるということは、非常に困難なことだと思います。ことにこの事態の因ってきたところを、過去一週間とか半月とかを区切ることなく、その原因、その原因と考察してみるならば、容易に決し得られるものではありません。

むしろ、権力と謀略によって強行される非人道極まる集団暴虐を眼前に見て感情が激発されたときは、極めて自然にかつ容易に、ある確信に飛び込むことができるでしょう。

そして、そうなったからとて、それを責めることは誰もできません。しかし、そういう機会に遭遇しない大多数の学生は、やはり迷わざるを得ないのが当然だと思います。そして迷っていいのだと私は思っています。無理に自分をその確信に追い込んで行

動にかりたてる必要はないのだと思うのです。

政治家は事態を作り出した当の責任者として渦中にあり、それをいずれにか運んで行かなければならない立場にある人ですから、たとえ、確信はなくても、何とか自分の行動を決めなければなりません。しかし、学生やわれわれは立場が違います。(国民は主権者だ、政治の局外者ではないはずだ、などという大ざっぱな議論はここでは通用しません)。ある種の学生や一般人のように、自分たちの仲間があればほど大きな事件を起こしているのにもかかわらず、それにはほとんど無関心で、ガリガリと勉強したり、ダンスやドライブを楽しんだりしているのはもっての外であります。われわれは深く憂えて事態を見守っていることは許されていると思います。

なお、参加、不参加の問題とは別に、あらゆる学生は、「このデモが国際共産勢力によって行なわれ、参加者はみな共産党かそれによって煽動されたものばかりだ」という、国の内外に飛ばされたデマを打ち破って、その大部分は戦争を恐れ、平和を求める

純真な気持から行動したのであるという真実を知らせるために努力しなければならないと思います。

こんどのことで強く感じた一つのは、公の問題について真剣に思い悩んでいる息子や娘に対して、真によき指導を与えることのできる父親が意外に少ない、ということ。如何に子どもの身を案ずるのあまりとはいえ、デモなんかに参加したら家へは入れないぞ」としか言えない父親が何と多いことでしょう。近頃はおかあさんの方が、ものを考える人が多いのではないかしらとさえ思えます。そういう父親は二言目には、

「人生経験の乏しいお前なんかにはわからない。だから長年の経験を経ているワシの言うことに従え」と言うようです。そしてなぜという説明をしないのです。

ただそれは生き方について自分自身にしっかりと見解がないのだと思います。子どもも十七、八以上にもなれば、人生のどんなにむずかしいことでも、

詳しく話してやれば、だいたいの理解はつくものです。ことに、子どもがこんどのような重大な問題にぶつかって自分の行動に疑いをもっていている場合などには、もし父親が、自分の信ずるところを誠意をこめて話したならば、理解しないということはないと思います。もちろん理解したからといって、その意見に賛成し、従うかどうかは別問題です。

しかし、父親としてはそこまでの努力はすべきだと思えます。「お前にはわからない」というのは不機嫌な逃げ口上にすぎません。それではあまりに頼りなすぎます。

こんどの大事件は多くの学生に、深い意味の自覚と行動の原理を真剣に求めさせるよい機会になったと思えますが、同時にわれわれ父親族にも、浅い常識的な判断を超えて、もっと真剣に事物の実相を捉える努力を強いているように思います。

この後で朝日新聞（六月十六日）の「ひととき」欄に載っていた次の投書について話し合いました。

大へん面白く且つ実際的な問題なので、そのときの皆様のご意見や私の感想などを書きたいのですが、紙面に余裕がありませんので割愛いたします。お父さま、お母さま方もこの投書をお読みになってみて、ご自分のお考えをもう一度たしかめてみていただきたいと思えます。

お父さま方の運命を支配する重大な教育上の根本問題の一つだと思いますので。

「子どもが善良なる故に不安」

（朝日新聞「ひととき」欄より）

ことし高校へ入学した私の子ども（次女）は静かで明るい性格です。そして素直ですが、なかなか正義感が強く、思いやりがあります。小学校、中学校とも、あまり勉強はしませんでした。成績は上の方で何回も委員に選ばれました。

私はこの子のことがうれしくもありひそかに自慢

でもあるのですが、半面不安でもあるのです。というのは、この子があまりにも清潔な気持を抱いており、善意に満ちているからです。

それでこのごろ「もつとドライに割り切つて物を考えなければだめよ」とか、ときには、「もつと悪くなりなさい」と言つことさえあります。

むろん私は自分のそういう態度をいいことだとは思っていません。しかし、現実の問題として、いま社会では、善良な人間より、悪い人間の方が、だいたい社会的にめくまれた生活をしていますし、幸福になる可能性も多いと思つからず。

子どもの善良な気持を、どこまでも伸ばしてやりたい、と願うのは、親として当然ですが、社会に出て落後しないように、たくましく生きられるようにとねがうのも、また当然のことではないでしょうか。

私の夫も、善良なるが故に、過去においてにがい経験をして来ましたが、現在でも、それが自分の欠点だと認めています。

(横須賀市夏島 主婦、四十五歳)

入室、退室の作法について

入室、退室の作法がみだれて、学校の教室のような気分が濃くなってきた。

はじめ塾有法堂は、学問をし、修養をする道場なのだから、ウカウカした気持で出入りしてはいけない。あらためてきまりを左に掲げておくから、自分も守り、人にも守らせるように心がけよう。

一、室に入るときは、一旦止まって右足から静かに入る。

一、入ったならば正しくすわって、先生に向かって正しく礼をする。

一、出るときも正しく挨拶をすること。

◇ 行事と案内 ◇

○ 仏教会 七月二十四日 東泉院にて

講師 内山興正師

まみず

昭和四十八年
七月号

聞く姿勢

白杖 30

他人の主張や意見の、どこに反対することができるか、という気構えで聞く人と、どこに賛成できるか、という気で聞く人とがある。前者は敵を見つけ、後者は協力者を見つけてる。

和を説く宗教の信者とヒューマニズムの忠実なる実践者を以て自ら任ずる思想家に、前者が意外に多いのはどうしたわけだろう。

平和と進歩は、前者によってもたらされるのではなく、後者によってもたらされるのに。

やま 7

柿の葉の人生

和田 重正

(小田原はじめ塾)

木の葉には、その種類によってそれぞれに異なった趣があり、それが勝り、それが劣っているということはできません。秋の楓かえでや公孫樹いぢようやはぜのはなばなしきは格別ですが、春から初夏にかけての樟くすの若葉の盛り上がるようなつやつやしさも暖地に住む者の大きな楽しみの一つです。山の中で、朴ほおの大きな新芽が、白い綿毛に包まれて伸び伸びと大空に向かっていくのも心のつかえを払ってくれます。櫟くぬぎや枌とちなど、雑木の葉もそ

れぞれに捨て難い味をもっている。櫛けやしきの大木を見上げると、どこまでも細かく枝分かれした繊細な梢の先に、これと特徴のない小さな葉が、控え目な様子でついています。この控え目さんは春、割合おそく芽吹き、秋には誰よりも早く色づいて、小さな台風が来るとサツト吹き払われてしまいます。大木の葉と生まれながら取るに足らぬ己であることを知り、はかなさを嘆きもせず素直に散って逝く哀しい櫛の葉よ。

こうして挙げていったらキリがありません。椎しいや榎えんの常緑潤葉じょうりくじゆんあつ、松杉の針葉についての感慨は割愛して、話を本題の柿の葉に移します。

柿が冬の眠りから醒めるのは、

何月何日でしょうか。それは四月一日です。小田原では十年のうち八年はその日にすべての柿の木が目を醒まします。今年は二日おくられて四月三日でした。これは気候不順のせいだと思います。

私の家の二階から、隣の家の屋根を越した向こう側の空地に、大きな二本の柿の木が見えます。この柿の木については、わが家がここに移り住んでから三十年ほどの間に、いろいろ思い出となる事件が起こりました。うちの末子が二歳ぐらいいのとき、夏の終わり頃でした。近所の少し大きい子にすすめられて、この木から落ちた腐った柿の実を食へて疫痢になり、避病院（法定伝染病の患者を隔離・収容していた伝染病院の通称）に送られた

ことがありました。その時付き添って入院した家内が、おかげで栄養失調から脱して帰って来て、避病院の有難さを語り合ったことがあります。

またある時、うちの塾生が、夜その木に登って、柿を取って食べへていました。それを近所の人が何か勘違いしたのでしよう。一一〇番に電話したので、パトロール・カーがやってきて、五人の警官がその木を囲んでしまったのです。木の上で柿を食っていた少年は、急に地上に起こった異常な騒ぎに驚いて、「どうしたのよう」と降りてきて無事逮捕される、というマングのような一幕もありました。この柿の木は、むろん所有者があるのですが、毎年近所の誰彼

となく勝手に取って食べているのです。その誰彼の大半が私の塾の子たちであるのは、自然の勢であります。

さて、そんなことは関係のないことですが、私はこの柿の木を一年中見て暮らしています。

先にも言ったように、四月一日になると、この木のすべての枝の先から、ポチッと小さな光が発せられます。黄緑の無数の光がともされたように見えるのです。それが二、三日のうちに、三倍にも五倍にも大きくなり、次第に光から色に変わってきます。この頃、小雨が降って枝が黒く濡れると、若芽の色は一層活き活きと楽しげになります。

四月十三日〜十五日——これは

このあたりの雑木林の新芽の絶好の見頃なのですが——この時、柿はもう幼い葉をいくらか開いて、そろそろテンブラにもできるほどになっています。

今は五月初めです。二階の窓から見える二本の柿の木は、少し緑の濃くなった中位の大きさの若葉にこんもりと包まれています。この頃の盛り上がった柿の若葉の特徴は、陰影が少ないということですから。他の木の葉は、沢山かたまっていて、もつと陰影が強く出ますが、柿の場合はよほど強い陽の光を受けないと、陰がクッキリしません。昼間に蛙の鳴声の聞こえる頃、このおだやかな緑の塊りを見ることは、どんなに慰めになることか。野バラが咲き、みかんの

花の匂う時、このおだやかな厚みのある緑の葉の塊りは、もう一つのいのちの味わいを教えてくれるような気がします。

この木は、間もなく可愛い花を散らし、小枝に青い実をならせます。

夏になると柿の葉は、黒いほどに色濃くなり、厚味も増して頑丈になります。裏を返せば、骨のような筋が見えます。この飾り気のない実用一辺の頑丈な葉は、夏の赫熱の太陽の光と、時々襲う豪雨や強風の猛威から、未熟な青い実を守っているのです。銜ひたすらいもなく、飾り気もなく、只管にわが勤めを、赫熱の中、豪雨の中で果たしている姿は、まことに頼もしい限りです。

そうしているうちに秋が来ます。実は赤くなり、葉の色も変わってきます。夏のうちのように、只実用的に、というのではなく、一応勤めを果たした柿の葉は表面に光沢が増し、裏と表の違いもハッキリして美しさが次第に増してきます。しかも柿の葉は、他の多くの木の葉と違って、一枚一枚手にとって眺めるに値する変化をもっています。たいていの人は経験があると思いますが、モザイクのように、葉脈で、細かく仕切られた一つ一つの部分が、濃い赤から濃い緑までの間のあらゆる色で彩られていて、しかもその色の組み合わせは全く千変万化です。何枚見ても飽きることができません。他の多くの木の葉のような大量生産的

色づけではなく、誰かが一枚一枚好みにまかせて丁寧に染めていたように見えます。このつつましやかな傑作を、時が来れば惜しげもなく振るい落として、柿は冬を迎えます。私は毎年、向こうの柿の木に最後まで残っている二、三枚の木の葉を、その散り際を見届けたくて、おどおどしながら氣を配りますが、幸か不幸かまだ一度も見届けたことはありません。気がついたときはいつも落ちてしまった後でした。

以上くどくどと柿の葉の一生を述べてきました。それはむろん、私がいろいろな木の葉の中で、柿の葉に特別な関心を持っているからに違いありませんが、それをわざわざここに述べ立てたのは、実

は、この柿の葉のような人生を生きて来た人物がいることに、深い興味を感じたからなのです。

私の従兄弟の一人にTというものが居ります。今年七十二、三歳になると思いますが、これが最近その属する業界新聞に求められて、自分の生い立ちから今日に至るまで、いわば自叙伝のようなものを書きました。それをこの度「私の歩んだ道」と題して一冊の本にまとめました。

贈られたこの本を読みながら、私は何度も柿の葉のような人生だと眩かないでいられます。いろいろな人生があつてよい。それはそうだが、奇人や天才は別として凡人の生涯としては柿の葉の如くに生きられたらそれが最高では

ないかと思うのです。

Ｔの人生がどのように柿の葉的であつたか、それを詳しく紹介することはできません。それには彼の自伝を読んでもらうより仕様がありませんが、ともかく彼の生涯は初めから晩年の今日に至るまで先に述べた柿の葉の特徴を遺憾なく実践してきたと言えるでしょう。

Ｔは大和（奈良県）のある中農の家に八人兄弟の長男として生まれました。稀に見る人柄のよい両親の間に生まれたことは、何よりも大きな倖せでした。生まれた頃は丁度柿の芽のように可愛いく、澄んだ目を無心に輝かせていたことでしょう。それから中学を卒業するまでは何の野心もなく、しかし、家庭や学校や世間から与えら

れる光と熱と栄養を、黙々と摂取して育つたようです。そしてフトした機縁で、東京の専門学校に入り、三年間私達兄弟と一緒に暮らしました。その頃からＴにも初夏が訪れ、やがて夏の烈しい光と熱と風雨に鍛えられることになりました。

Ｔは特別な天才があるようには見えません。しかし地道な努力家です。そして何よりも勝れているのは、物事の理非曲直の判断と正確な洞察力です。それは彼の頭の良さというより我執の少ない人柄から出た力だと思えます。その謙虚さと努力は、独自の業績を生み、海外へも進出して、国家社会に貢献するところも少なくありませんでしたが、それよりその努力と苦

闘の間に示した彼の人間的な温かさの方を、私は高く評価したいと思います。

表向きの業績のスケールの大きさは、必ずしもその人の人間的価値とは比例しません。アメリカ大統領のニクソンなどは、バカでかい仕事をしています。立派な人だとは誰も思わないでしょう。また、投機と買占めで、庶民の生活を脅かして莫大なお金を掻き集めた丸紅その他の商社の当事者を、リコウな人間だと思つてはいません。洋服を着たアニマルだと評すればましな方でしょう。

ともかく私たちは、人間の働きの量より質で、その人の値打を量りたいと思います。

Ｔが創立して育てたのは、ユニ

ークな特質を持った事業ではあっても、規模から言って中企業の一つとみなければなりません。その位の仕事をした人は世間には沢山あるでしょう。しかし、最も厳しさを要求される事業家として、人間的温か味を失わず、益々その味を深めて、老境に至って美しい彩りと光沢さえも表わして来たTのような人物は、あまり例がないのではないかと思います。

柿の葉の特徴は

○ポツテリと厚味がある

(実用性のことです)

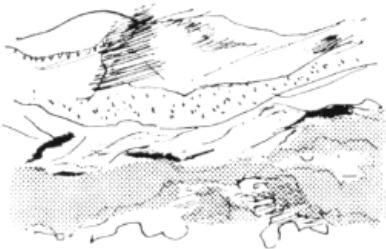
○銜くはがない

○若い時はフックラとナイーブで老いては目をみはるような美しさを表わす

○始終底の方に宗教味を宿す

私はもう学まなぶにはおそい。

幼にして蝕れた櫛の葉のような色艶のない生涯を、殆ど生きてしまった自分は、それに安んずるより仕方がないと思いますが、若い人は——奇人や天才でない凡人は、柿の葉の如くに生きることを学んでもらいたいと思います。



まみず

昭和四十八年
八月号

白杖 31

能力と超能力

世の中にはすばらしい能力を具えた人があるものだ。一を聞いて十を知る人、努力の天才、抜群の直感力、希には霊能力をもって神仏や守護霊の指図を受けることのできる人さえあるらしい。そんな人に接すると、無力のわが身を嘆かざるを得ないのが凡情である。

しかし、凡愚は凡愚なりに、超能力と共に生きる悦びを納得できることも事実である。

やま 8

うたかたの記

自分のフトン

和田 重正

(小田原はじめ塾)

うたかたの記

夕立の後など、庭のあちこちに浅い水溜まりができます。水溜まりの一方には出口があつて水は緩やかにそれに向かつて動いていきます。その水溜まりに木の葉の雫か、屋根からの雨だれの残りか、大きな水滴が落ちるとあぶくができます。大きいのができて、それがゆっくり動いて出口の方へ行きます。でも無事に出口に達す

るのはめったにありません。風が吹くとあらぬ方へ押しやられ、その拍子にパツと消えてしまうことが多いのです。それでなくても、なんでもないので自分勝手に、急に消えるのもしばしばあります。

小学校に入る前後頃、私はよく縁側からそういう景色を見たものです。

そしていつも思ったのは、「あぶくとあぶくがくっついたらどうなるだろう」ということと「同時にいくつか浮かんでいる」あのあぶくたちが、どうして同じ方へ動かないで、めいめい勝手な動き方をするんだろう」ということでした。しかし、私はあぶくとあぶくがくっついたり、衝突したりするのを見たことがありませんでした。ま

た、時には小さな水溜まりの中で、二つのあぶくが反対の方向にさえ動くことがある不思議を、遂に解明することができませんでした。よほど理学的探求心に欠けた子どもだったのでしょうか。

それはともかく、明治の末から大正の初め頃の少年であった私は、水溜まりのあぶくを飽かずながめ、それにつれてゆるやかな想像力を働かせて、ものあわれを、それと知らずに、しみじみと味わっていたのです。後に、中学生になって方丈記を習い、よどみに浮かぶうたかたはかつ消え、かつ結びて久しく止まることなし、という文に出会ったときにも、黒い土の上に出来た浅い水溜まりに浮かぶあのあぶくを心に描いて、深い感動

を覚え涙したものです。
あぶくと言えばもう一つなつかしい思い出があります。

やはり小学生の頃、家が小石川にありました。江戸川の少し上流に大滝という滝があつて、いつも大量の水が百雷というほどでもありませんが轟音ごうおんに地響きを立てて落下していました。あたりはしぶきが飛び散つて、いつも古井戸のような臭いが立ち籠めていました。その下をのぞくと無数の泡が出来て白くなっています。その無数の泡のうち、流れに乗って滝壺から走り出るのは極く僅かです。そのうちどれが一番遠くまでもつかと思つて、いつまでも見守つていたものです。一番運のいいのもせいぜい三間（五・四メートル

と言ってしまったのは折角の夢が破れてしまいそうです(ぐらいで、ズバ抜けて五間も六間もつものは一つありませんでした。それでも、もしやと思つて次から次へと流れ出るあぶくたちをながめていたものです。その時の、何かを期待して目を見張っていたあのきれいな気持が、今も思い出されてなつかしさに堪えません。

あれから六十年近くたちました。今では夕立のあと水溜まりの出来るような庭のある家は、めったにありません。広さも問題ですが、それより人工化されて、自然の水溜まりの出来る余地がなくなってしまうのです。少し広い庭は芝生になっていたり、花壇ができて

いたりします。昔の住宅のように、縁側の前に何もないただの土の空地が広がっている、という家は殆んど見られなくなりました。まことに残念なことです。

花も芝生もきれいに違いありません。しかし何も無い、ただの土のよさとは比較になりません。雨が降れば水が流れたり、溜まったり、乾けば蟻が走り廻る、自然そのままの大地ほど深いなつかしみをたたえたものはありません。今の子どもたちにもこの土の匂いを、そしてその上に描かれるうたかたの、結んで消えるすがたを、味あわせてやることはできないものでしょうか。

滝の方はどうなっているでしょうか。恐らくあの滝の下には今も

泡がいっぱいあるでしょう。昔よりもっともっと白く泡立っていることだろうと思います。しかもその泡は五間や六間でなく、どこまでも消えることなく流れに運ばれて行くのではないのでしょうか。中性洗剤という文化のあぶくが溢れているのでしょうか。

ああ自然の土・天然の水。

自分のフトン (布団)

みなさんは、自分が毎晩寝るフトンを正確に思い出せますか。私はいまこんなことを書きはじめながら考えてみても、自分のフトンがどんなのか思い出せません。自分のご飯茶碗の模様だって、思い

出せる人は少ないのではないでしょう
か。それは、われわれが必要
以外の物事には、ハッキリと焦点
を合わせて見聞きしていないとい
うことだと思えます。それがいい
ことなのかわるいことなのか、よ
くはわかりません。しかし私は、
それは必要なこととそうでないこ
とを自然に別けて、余計な混乱
を起こさないで済むように仕組ま
れた、人間のすばらしい知恵の働
きのように思えます。その証拠に、
私たちはもしフトンが替えられて
いたり、新しい茶碗にご飯がつけ
られていたりするとすぐに気がつ
くでしょう。つまりフトンの柄や
茶碗の模様は、具体的に思い出せ
るほどハッキリ見る必要はないけ
れど、替えられたとき、これは自

分の日常用のものではないと気づ
く程度には、なんとなく知ってい
ることは、必要があるということ
でしょう。人間の注意力とは全く
うまくできているものですね。必
要があればそれだけハッキリと意
識し、印象づけられるのです。こ
れは大事な事実です。殊に教育の
上ではキーポイントになる重要な
ことなのです。

しかし、私がいま話そうと思っ
ているのはそんなことではありません。
せん。もつと楽しいことなのです。
私は小学校二年生の頃、夜、寝
床に入る時、ヘンなことに気がつき
ました。そして上手には言えませ
んが、「ああ、またこのス(菓)に
入るのか」というようなことを思
うのです。そう思う時の感じは、

決してイキな感じではなく、うれ
しいというほどではないが、ホッ
とした、いくらか安らぎの感じと
言えるでしょう。それだけでは言
い表わされていません。自分のフ
トン——だれからも侵略されない
自分のフトンがあるということへ
の不思議な感じも、濃厚に加わっ
ています。

このヘンな感じは、それから六
十年近くもたった今でも変わって
いないのです。毎晩ではありませ
んが、寝巻に着換え、寝床に入ろ
うとするとき、時々同じ感じが催
してきます。

自分のフトンというものは不思
議なものです。

私は小学生の頃、ずいぶんおそ
くまで寝小便をしました。ひどい

時は殆んど毎晩欠かさずにやりま
した。それは丁度母が死に、父が
外国にいて、我々兄弟は親類の家
に保護されていた頃のことです。

その叔母さんや大きい従姉たち
は私に悲しい思いをさせないよう
にと心を配って、とてもよく面倒
をみてくれましたが、私は毎朝目
がさめると、濡れたせんべいブト
ンをどうしようかと、心を砕いた
ものです。そんな工合ですから、
私のフトンは全くひどい小便臭さ
だったのですが、それでも私は寝
る時になると、「自分のフトン」を
強く感じたものでした。それを感
じると同時に、泣きたいような気
持になったことも憶えています。
六十年近くも「自分のフトン」
を意識してきましたが、それはわ

るい感じではなく、むしろ好ましい
感じであることは前に言いました。
しかし、それに執着するほどのも
のではありません。小学生以来今
日まで、私のフトンは何十回とな
く代わってきたでしょう。夏と冬
でも代わっているのだと思います。
それでも別段気になりません。よ
その家で泊まる場合などにも、フ
トンが変わったために寝にくいと
いうことはありません。どんなフ
トンでもグーグーよく眠ります。
だけでも、やはり自分のフトンに
は何か特別なものがあります。巢
の感じがするのです。

これに似た感じが、他にもある
ような気がします。なんでしょう。
恐らく故郷ふるさとだろうと思います。

もしかすると祖国かも知れませ
んが、これは日本以外のどこへも行
ったことのない私には実感できま
せん。

その他に私の実感にもっともび
ったりくるのがあります。それは
やはり自分が出て来たところそし
て帰るところです。そこはなんと
言ったらよいか名づけようがあり
ませんが、それはこの世のどこか
でないことは確かです。ではあの
世かと言えばそうでもありません。
夢の国か、そうでもありません。
みなさんのうちのリコウな人は、
「そつだ！ 心の中の国だ！」
と叫ぶかも知れませんが、残念な
がらそれもハズレです。こんなこ
とを自分から言い出して、困って
しまいました。そこは名がないの

です。だからスカツとしてよい答が見つからないのです。

ではどういう時に私はそれを感じるかという時、一人でトボトボ歩いている時とか、山の畑で黙って草をとったり、鍬を使ったりしている時、それから自分一人で静かにお経を読んだりキチンと坐ったりしているときなどです。

そんな時、私は「自分のフットン」に似た感じ、——汗臭さや小便臭さのままで一種の安らぎを覚える——あの無条件の感じを感ずるのです。

こういうのは誰でも経験しているのか、私の独特の感じなのかはわかりません。どうなのでしょう。



よく聞く

和田重正

はじめ塾では例年の通り今年も一心寮で色々な種類の合宿をしました。いずれもその主用目的は、よい生活を身につけるということでした。

よい生活をするために一番大事なことで、今日の若い人たちに非常に欠けていることは、人の話をよく聞く態度です。それで一心寮では小学生から大人に至るまで全ての合宿の最初に私が言うことは

このことなのです。

「この人は何を言おうとしているのか」と心を傾けて聴く態度。これが協同生活の中でよく生きるための基本だということです。

先日、中学生の合宿のとき、作業として一部の人がお茶畑の除草をしました。簡単な仕事ですが畑仕事など一度もしたことのない都会の子たちが主ですから、この草をどういう要領で取り、取った草をどう始末するかななどをあらかじめ話しました。

いざ始めてみると二十数名のうちの名のものがメチャクチャなことをしているのです。そこで私はその三人別々に、さっきの私の話を聞いていなかったのではないか、と聞いてみました。すると

三人とも相談しあったように全く同じことを言ってますまっているのです。「聞こえなかったんです」というのです。私は呆れかえってしまいました。

「聞こえるのを待っているのではなく、聞くんだよ。どうしても聞こえなければ、聞こえませんか」と言って、ともかく人が何を言っているのかを知る努力をしなければいけないのだ」と。

学校ではそんな場合おそらく「そうか」とその言い訳を受け容れて先生の方が反省するのだろうと思います。しかし私はそのような自分の不行き届きを棚に上げて、子どもたちにもっと積極的な態度を求めるのです。

まったく子どもでも青年でも、

聞こえるのを待っていて、自分の方から聞こうという態度がありません。これは今日の学校教育の行き届きすぎた教育姿勢のせいだと思います。むしろ家庭でも学校の方針の線に忠実に沿おうと努力するのが日本の現状ですから、子どもたちが遍く受け身の姿勢になるのは当然です。中にはうちの子ど

もができないのは先生の教え方がわるいからだと言わねじ込んでいく母親さえあるそうです。先生は専門家ですから教え方の研究もしなければなりません。しかし教え方の勉強もしたことのないお母さんから指図を受けたら先生はなんと応対してよいか困るでしょう。お母さんというものはその分を守って、まず自分の子どもの学習態

度——何よりも、よく聞く、ということを身につけさせる努力をすべきだと思います。この態度を身につけさせるのは学校教育の中でも重要な項目でなければなりません。が、何といってもそれは家庭での生活の中で養うのが最も効果的であることは明らかです。

日常われわれが付き合う大人の中にも、人の話をろくに聞かないで途中で自分勝手な思いつきをしやべり出す人があります。実際の例を見てもそういう母親と、人の話をまるで聞こうとしない子どもとの結びつきは極めて濃いと思います。

それから人が話をしてるときほんやりとほかのことを考えている人があります。母親学級などへ

行つて話すとよくさういう例にぶつかります。一時間半も二時間も熱弁を振るわせた後、司会者ではどなたかご質問をと言つと、

若いお母さんが立ち上がつて質問をします。ところがその内容は講師が一時間半も二時間も喋つてきた問題そのものについてなので、例えば私は何処へ行つても、今日の学校でやっているような勉強を子どもの能力や性格を無視してむやみに子どもに強いることは子どもの精神の発達をゆがめてしまふ。本当に子どもの幸福を長い目で見て考えたら学校の成績などにあまりこだわらず、したがつて有名校の進学などに重点を置かず、子どもの時代には子どもの自然の生活をできるだけさせるようにし

たり、日常充実した生活をさせるようにして心身の健全な発達を図るべきだ、と言つて話をします。

すると質問に立つたお母さんが「大変結構なお話ですが、さういう風になっていると上級進学ができなくなりはいないかと思ひますがいかがでしょう」と。

こんな例は二度や三度ではありませんが、私はこういう人の、何でもかんでも有名校へ入ることが子どもの将来の幸福を確保する所以であると思う迷妄を打破しようとして一生懸命しゃべつたのです。そしてお母さん方もそれを、おとなしく、ときには調子よくうなずいたりしながら聞いてくださるのです。ところが、こういう代表質問が出ると多くのお母さんが「そ

うよネエ」と言わんばかりの顔でされるのです。まったくガツカリさせられることが度々です。

本当は、私が人の話をよく聞く習慣をつけるようにとらうさく注意するのは、必ずしもそれだけの意味ではないのです。

何事に対しても真向かいになつて取り組む、という生活態度が大事だと思ひ、その最も基本的なこととして「聞く」ということを掲げているのです。何事でもいい加減、ウワノソラ、ふざけ半分、逃げ腰でやつては充実した生活はできません。

その上自分勝手な浅はかな考えを反省もなく主張したのではまともな生活になる道理はありません。ともかく食事でも掃除でもなん

でも日常の小さなことに本気でかかるという姿勢を習慣づけることが教育の基本だと思っております。その一番初歩で大事なことが、よく聞く「ということだ」と私は思っています。

そういう基本的なことをほっておいて勉強勉強と言って成績を上げることがばかりを要求しては、子どもが苦しんで反発するかいじけるか、いずれにしても健全な発達はできません。おまけに成績も上がりません。

そんな愚かなことをしないで、教育は正攻法でいきましょう。生活を充実してその中でこそ本当によい勉強もできるのだと思います。



「まみず」に出会って 32

山中真知子

六十年前のわたし

昨年の十月、朝日新聞に、

「自分って何？それが悩みです」

と題した投稿文が載りました。十

三歳の中学生が書いた文です。

「自分って何だろうと考えている

うちには流れてしまう」と、自

身の考えや悩みが素直に書かれて

います。「考えたくないけれど考え

てしまう。色々な事に挑戦して少

しずつ知っていききたい」と結ばれ

ていました。

読み終わって、六十年前の自分

に出会ったような気がしました。

自分と同じように悩みを持つ若い人がいることがとても嬉しくて、

新聞を切り抜いて手帳にはさみま

した。「私も同じように悩みましたよ」と伝えたいような気持ちでした。

それから十日ほど過ぎて同じく

朝日新聞に、

『自分』に悩む私たちはラッキ

ー

という投稿文が載りました。

十三歳の「自分って何？」を読

んで、昔の自分を見ているようで声をかけたくなったという二十四

歳の会社員の女性でした。

「悩むことができる私は贅沢だと感じ、新たな自分を見つけられる

ので深く悩むのはいい機会であり

ラッキーです」と書かれていました。

またまた私は感動してしまいました。二十四歳の若い方が十年前には同じように悩んでいましたよとの共感の文です。

「悩む私たちはラッキー」とエールをもらった十三歳の中学生は、どんなに嬉しい気持ちだったでしょう。

六十年前、十三歳だったわたしも、やはり同じように悩んでいました。そのときのわたしは頭の中でああでもないこうでもないともやもやしているだけでした。まとまりない言葉で日記に書くことぐらいしかできませんでした。

お二人は自分の考えを言葉にして、さらに投稿をしてその考えを

読んでもらおうとする前向きな姿勢に自分とは違う明るさを感じました。

自分を振り返ってみると、悩みながらもその悩みを投げ出してしまっただけの勇気もなく、ただただ抱え続けて悶々と毎日を過ごしていたように思います。自分と他人の間に目に見えない薄い膜のようものが自分の側にあって、どうしてもそれが取れないもどかしさの日々だったように思います。今思うと、しんどくても辛くても、その自分のままで過ごしていたことが結果的には悪くなかったと感じています。

何かヒントはないだろうかと本も何冊か読みました。ただ、誰かに「自分は どうして 生きて いるん

だろうか」という悩みを話したり相談をしたりすることはありませんでした。またその考えさえも浮かびませんでした。

高校生の時、今飯田先生から一枚のコピーを手渡された時のことを思い出しています。投稿の方の言われるように、悩んだことで得ることができたラッキーな瞬間だったのだなあと、しみじみとした気持ちになります。

そのコピーに書かれた和田先生の言葉が体の中にしみわたるように広がっていき、それが生きる手がかりとなって今日までつながっています。投稿をしたお二人に会ってみたいなあ、夢のようなことを想像しています。三人で真面目に生きることについていっばい

話ができるような気がします。もちろん、お茶とケーキつきです。

でも、若いお二人には私はきつと年寄りにみえるから、本当にこのおばあさんにも自分たちと同じように若い時があつて悩みもあつたのかしらと思われるかもしれない。そんなことを想像しただけでも胸の中が暖かくなって楽しい気分になります。十三歳の中学生の投稿を読んだときに、六十年前の自分に会つたと感じたことは素直な感情でした。でも冷静に考えれば六十年が経つても自分が若い時に悩んだように、今の若い人にとつても生きる意味を探すことは切実であり課題なのだなぁと強く思いました。

新鮮な自己

(うまれたてのじぶん)

二十三歳の夏、「まみず」の夏合宿に初めて参加した時に、一心寮の上の家で「新鮮な自己」と書かれた一枚のガリ版刷りの紙を見つめました。

「うまれたてのじぶん」とルビがふつてあります。それを手にして不思議な気持ちで読んだ時の自分を今でもしっかりと覚えています。読みながらすぐには理解できませんでした。

和田先生が合宿の間にこの言葉を使って何かをおっしゃったことは一度もありませんでしたが、とても大切なことが書かれているこ

とはわかりました。

上の家の床の間には「今ここ」と書かれた掛け軸もありました。

この言葉を見る度に自分はどう生きるかを悩み始めたころをいつも思い出します。「今ここ」を生きるようになるためには毎日を真面目に一生懸命に努力しなければいけないと思っていました。現実の自分は「今ここを生きています」といえるような生き方にはほど遠く、どうしたら今ここをしっかりと生きられる人間になれるのだろうか」と途方にくれるばかりでした。

自分のような意志の弱い人間には無理なのかもしれないと思う反面、いや、諦めたら終わりだ、と思っている自分もいました。

「明日死ぬ」と仮定して今日一日

を過こしてみようと試みたりもしました。そんな仮定を立てても一日は無事に終わり、結局は何も変わっていないじゃないかと自分で自分を追いつめていくばかりでした。「今ここ」という言葉が自分を追いかけるように毎日迫ってきて、崖つぶちに立ちすくむ自分でした。

「新鮮な自己」と「今ここ」の二つの言葉は大きな課題となつてその後を過こすことになりました。そしてこの言葉の意味に気付いたのは三十歳を少し過ぎた頃でした。上の三人の子どもたちがまだ小さいころでした。何か家事をしながらいつものように過こしていた時に、

「あっ／＼そうかあ。そういうことか」と理解したのです。一瞬の出

来事でした。胸の中が暖かくなつて泣きたいような気持ちでした。ほつとしたのです。心の中で、

「そういうことかあ、そういうことだったんだ」と繰り返していました。答えが正しいのかどうかは確かめようがないけれど、確信はしました。大きく安心をしたのです。

どこかはるか遠くの彼方に「新鮮な自己」を生きられる道があったのではなく、どう生きようかと発することは大事だけれども、努力をしなければいつか得られるようなものではなかったのだなあと感じました。たとえて言えば、しあわせの青い鳥を探す童話のように探しても探しても見つからなかった鳥が、家に帰ってきたら家の

中に青い鳥がいたというのに似ています。

ただ童話と違うのは、その青い鳥は自分自身であったことに気付いたことでした。

おそらく「あっ／＼」と気付いた人はいっぱいいるはずですが、気付いた人は誰も威張おごったりはせずに、自分の立っている場所で自分の役割を自分なりに果たしているように思えます。細胞のレベルだけでも、自分が母の胎内に宿った時から日々細胞は新しく成長し、生まれてから今日までも一日の休みもなく新しい細胞のおかげで生きています。古い自分は一度もいないことになりました。生きる意味に気付いた人は自分の言葉で語り、何とか人に伝えようとするのは本

能的な愛情のように思います。

和田先生が、「新鮮な自己」の言葉に「うまれたてのじぶん」とルビを振らずにはいられなかったのは先生の暖かい愛情のように思えます。今日生まれたばかりの赤ん坊もそして私も、喜代志さんも、子どもたちも、そして私の友人も、隣の人もみんな同じようにいつもいつも新しい自分を生きています。気づいている人にも気づいていない人にも同じように与えられています。何か大きな許しの中で心配しなくていいよと言われて生きていける幸せ。昨日は急けた自分でも今日急げていなければ昨日の自分とは違っています。いつでも「うまれたてのじぶん」です。両手を挙げて叫びたい気分になります。

この二つの言葉の意味を知ることとは最終の目的ではないようにも思います。生きるための基本の第一歩のように思えます。この基本さえわかかっていれば、悩んだり迷ったりした時に元の位置に容易に立ち返ることができて、いつでも一からスタートできるように思います。そうはいっても不安や悩みが消えてなくなるわけではないので、日々応用問題を解く努力が必要になってきます。

私の場合は、いつも問題を提示してくれたのは子どもたちでした。簡単な問題から難しい問題まで多種多様です。反抗期の時には丸めた問題用紙を投げつけられるような感じですが。投げつけられても解かないわけはいかない。逃げるわ

けにはいかない。子どもは、自分の親がどの程度かを試してくれま

す。子どもは敏感なセンサーを持っていますから、子どもだましのよ

うな手を使えば簡単に見透かされてしまします。時間がかかってもその場をごまかすような答えは出せませんから真剣です。親として成長するための見事なシステムです。面白いことに問題を投げた子ども自身がその答えを隠し持っていることです。もちろん子どもは回答を持っていることは意識はしていないのですが、子どもが正解を持っているということを五人の子どもを育てながら何度も実感してきました。それは自分の行き過ぎた考えなどを子どもが問題提起

をしてくれたからこそ気づくことができたと感じるからです。親は子どもよりも何十年も前に生まれて人生を歩んではいますが、子どもが生まれた時から親も同じ時間の共有者であると思っています。少しばかりの経験値が自分にはあるかもしれませんが、子どもが生まれたら親と子の時間のスタートラインは同じです。いつも頭並びの状態です。先に生まれた子は下の子よりも少し経験値はありますが、やっぱり同じ時間を過ごす関係です。そう考えると子どもたちを育てている時間は本当に幸せな時間だと心から思います。

子どもたちから次から次へと出される難問を解いて行くときの太

きなヒントになったのは、やはり和田先生から聞いたお話や言葉でした。和田先生がおっしゃったことは、こういうことだったんだなあ、と思えることがたくさんありました。一つの解答を得たと思っても安心してまた次の扉が待っているということの繰り返しではありませんが。その問題を解きながら子どもを育てて行く中で、わたしと喜代志さんは相談をしたわけでもないのに二人とも和田先生の言葉を直接に使って子どもに話したことは一度もないのです。和田先生から聞いたお話は自分自身が生活を通して実践していくことだと思っただけでした。

子どもを育てていると小さい悩みや少し大きな悩みなどが日々あ

ります。自分で対処できる時はいいのですが、何となく不安が起き始めてくるとそれがどんどん膨らんできて、自分では抱えきれなくなってきました。そんな時は、喜代志さんに相談します。

『心配ないよ。大丈夫だよ』と言われると安心します。おそらくわたしは不安になると物事を客観的には見られなくなって、問題のそばへ近づいてしまっているので近視眼的になってしまい、結果的に大したことでもなくても不安が大きくなってしまいうようでした。時には子どもの進路などでわたしと喜代志さんの意見が違うこともありましたが、話し合ってみると子どもの気持ちに沿った喜代志さんの考え方や判断には間違いがなくて、

父親としての視野の広さにはいつもわたしはかありませんでした。

「悩んだり困ったりしてもいつもアドバイスや励ましをくれるので、安心して子育てができたと思っています。」

若い時に、夏の「まみず」合宿で同じ空間の中で和田先生のお話を共に聞いたことは幸せでした。

来年の十一月には結婚五十年を迎えます。

五人の子どもを育てながら喜代志さんと共に過ごしてきた五十年近い年月はわたしにとってかけがえないものです。

喜代志さんとの結婚が決まったときに、和田先生が、

「この結婚は真知子さんにとって

よりよい結婚です」

とおっしゃった言葉があらためて心に響いています。

いつものようにご自分の頭を手のひらでなでながら

「いやあ——真知子さんねえ——
そっじゃなくてねえ——」

と笑顔で話されていた和田先生のお顔が思い出されます。

出会えてよかった

一心寮の上の家の縁側に座っている二十三歳の自分を思い浮かべています。

「新鮮な自己」うまれたてのじぶん
を手にして読んでいます。

その同じ縁側の少し離れた場所

に、七十三歳の今の自分を座らせてみます。あの時からの五十年のわたしが連なって座っています。

まるで金太郎飴のような光景です。飴細工の職人さんが金太郎飴をつくる様子をテレビで見たことがあります。細く伸ばした飴を包丁の背でコンコンコンと割っていき

ます。ころころと同じ顔の金太郎が次から次へと出来上がってき

ますが、機械で作った金太郎飴とは違って、よく見ると一つとして同

じ顔の金太郎はいません。泣いたような顔、怒った顔、笑った顔、

すっぱそうな顔、真面目な顔。

和田先生と出会ってからのわたしもこの手作りの金太郎飴のよう

です。自分の顔をした飴を一口口の中へぽいと入れてみます。甘い。

いや苦い。すっぱい。いろんな味が混ざりあった味がします。どこにも売っていない、たった一つの自分の飴です。縁側に座っている二十三歳のわたしに向かって七十三歳のわたしが心の中で声をかけます。

「新鮮な自己」に出会えてよかったよね、と。

仲間たちと一緒に、和田先生のお話を聞きながら過ごした夏の一心寮。

合宿のざわめきが聞こえてくるような気がします。あの縁側は夏でも涼しい風がさあっと通り抜けていきました。

——懐かしい懐かしい場所です。

最後に

この号で「まみずに出会って」は終わります。

『ここに帰る』四十号（平成二十六年五月）から書き始めましたから今回の八十二号でちょうど十年間書き続けたことになりました。当初はこんなにも長く書くことになるとは思いませんでした。

久しぶりに二人で一心寮へ出かけたことを書いた喜代志さんの文章が三十九号に載りました。そんなこともあったからかと思いますが、平澤さんから、

「何か真知子さんも書きませんか」とお電話がありました。若いころに読んでいたまみず誌や、くだか

け誌にも時々書かせてもらっていいましたから、

「字数はどのくらいでしようか」「字数が短いとその中でまとめるのが結構たいへんなんです」と、勝手なことを言ってしまうました。

平澤さんはそれを聞いて、「字数制限なしで書いてもだいじょうぶです」と

とおっしゃってくださいだったので、和田重正先生を知るきっかけになったことや、夏の「まみず」合宿のこと、喜代志さんとの一心寮での結婚式のことまでのことを書きました。

その後、平澤さんが我が家までいらしてくださって、

「結婚後のことも書いてみませんか」

と、お話がありました。

「実体験を、ありのままに書いて
くださいばいいのです」

と平澤さんからは言われました。

子育てのことや、喜代志さんと
過ごしてきたことを和田先生にお
伝えするような気持ちで書いてみ
ようと決めて、お引受けしました。

頭に映像のように浮かんでくる
できごとを、一枚一枚切り取りな
がら書き進めてきました。

子どもたちの小さかったころな
どを思い浮かべながら、パソコン
に打ち込んでいく作業は楽しいも
のでした。

パソコンも、最初のころに比べ
たらずいぶんと早く打てるよう
になりました。

平澤さんのきめ細やかな添削や

校正によって、読みやすくなった

部分もたくさんあります。心から
感謝の気持ちでいます。

喜代志さんも一読者として毎号
を楽しみにしてくれて、

「そっかあ。こんなこともあった
かねえ」

と言って、懐かしそうに読んでく
れていました。

長い間お読みくださって、あり
がとうございました。



昭和四十八年
まみず学苑 夏の合宿

真知子さんと喜代志さんが
初めて出会った合宿でした

後記

「わたしの考察その後」(八十一号掲載)を寄稿くださった角純一郎さんはある期間、一心寮で生活されました。それはちょうどわたしが一心寮に世話になっていた期間とも重なりました。

角さんは重正先生によく質問をされ、ノートに記録(日記)もとっていました。角さんの先生への質問を時々耳にするのとわたし自身が問題として温めていたことと重なるところもあって、「ははあ」と先生の対応を予想したりしました。納得できないところはしつこいくらいに繰り返し問い直されていた角さん、そこまではしていなかった自分、その違いを感じました。

今回の寄稿を拝読して、かつての一心寮時代とは異なる、角さんの心境の変遷みたいなものを感じ、時の流れを思いました。

『個を超えざる精神性についての一考察』(角著)は当会から発行され、ホームページでも読むことができます。

山中真知子さんの『まみず』に出会って」がこの号で完結となりました。

重正先生と出会われるご縁を得てからの半生を、長きにわたって執筆くださいました。ときにハラハラしながら、次の展開を想像したりしながら味わわせていただきました。

真知子さんと喜代志さんの生きてこられた様々の場面からは、氣付かされ、学んだことも少なからずありました。

もしかすると今後、今までに執筆されてなかったお話を思い出されることがあるかもしれません。そのときはまたお寄せいただければありがたいです。

『あしかび』四号の米大統領秘書 Hage さんが立ち往生したのは六十年安保のときでした。六十年安保、七十年安保と日本は大揺れに揺れました。

そのころの学生気質を懐かしく思い出します。人々の気質、生き様と、時代との関連を思うこのころです。 平澤

和田重正に学ぶ会機関誌『ここに帰る』 第82号

令和6年7月1日 発行

発行者 〒399-3301 長野県下伊那郡松川町上片桐1352
和田重正に学ぶ会 平澤 正義

和田重正に学ぶ会ホームページ <http://wadashigemasa.com/>

和田重正に学ぶ会 会費は年二千円 『ここに帰る』バックナンバー お分けします(有料)

◇◇ 当会活動資金へのご寄付 大歓迎 ◇◇